

O2-015

当院におけるビタミンD欠乏症7例の検討
—適切なスクリーニングに向けて—

森 潤、中島 久和、細井 創

京都府立医科大学附属病院 小児科

【背景】

ビタミンDはカルシウム・リンの恒常性維持や骨代謝に関わるホルモンである。摂取不足や日光暴露不足などがビタミンD欠乏症のリスクに挙げられる。近年、ビタミンD欠乏症が世界的に増加傾向にあるとされている。

【目的】

ビタミンD欠乏症の症例の詳細を検討することにより、ビタミンD欠乏症の適切なスクリーニングにつなげる。方法：2016年4月から2017年2月までの間にビタミンD欠乏症と診断した7人について後方視的検討を行った。ビタミンD欠乏症の診断は日本小児内分科学会ガイドラインに従い25ヒドロキシビタミンD(25(OH) VitD) 20ng/dl以下とした。

【結果】

診断時平均年齢 18 ± 4.1 ヶ月(1-31ヶ月)。カルシウム、リン、ALP、25(OH) VitDの平均±標準偏差は、 10.3 ± 0.3 mg/dl、 5.2 ± 0.2 mg/dl、 1334 ± 242 IU/l、 13.4 ± 2.3 ng/dl。低カルシウム血症・低リン血症は誰にも認めなかった。6人が身長-2SD以下の成長障害、6人がレントゲン写真でくる病所見を認めた。全ての患児が以下のような基礎疾患を持っていた。卵アレルギー：1人、低出生体重児：2人、全身性骨疾患：2人、Bartter症候群：1人、先天性血管拡張性大理石様皮疹：1人。

【結論】

基礎疾患のある児で低身長を認めれば低カルシウム血症・低リン血症がなくてもビタミンD欠乏症を疑い、スクリーニングする必要がある。

O2-016

アミノ酸代謝異常症患児姉妹の食事療法と
学校給食の両立にまつわる課題と成功要因
—主たる養育者の語りの事例検討より—山口 慶子¹、涌水 理恵²、石毛 美夏³、
小川 えりか³、高野 智圭³¹筑波大学大学院人間総合科学研究科 看護科学専攻、²筑波大学医学医療系 小児保健看護学、³日本大学医学部小児科学系 小児科学分野

【目的】

本研究の目的は、食事療法と学校給食の両立が上手くいっているアミノ酸代謝異常症患児姉妹の主たる養育者の語りを事例検討し、両立にまつわる課題と成功要因を明らかにすることである。

【方法】

本研究は、ICレコーダーを用いた対面による半構造化面接調査である。対象者は、中学生と小学校高学年のアミノ酸代謝異常症患児姉妹の食事療法を主に担う養育者1名とした。面接内容は、食事療法にまつわる生活体験全般とし、本研究では学校給食に関する語り内容を分析の対象とした。分析方法は、ナラティブ分析³⁾とした。語りをコード化し、テーマとサブテーマを生成した後、患児・家族・学校それぞれの食事療法と学校給食に関する課題と成功要因を分類してまとめた。面接日は、2016年12月の患児姉妹の外来受診日であった。本研究は所属機関の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

主たる養育者の語りから、食事療法と学校給食の両立における8つの課題と18の成功要因が抽出された。患児については、〈学校での治療ミルクの準備と摂取の手間〉などの4つの課題が抽出された。主たる養育者については、〈患児二人分の除去代替食の準備〉〈外泊時の食事療法遵守に向けた準備の大変さ〉の2つが抽出された。学校については、〈学校によって異なる食事療法への理解と対応〉〈学校栄養士の知識やスキルのばらつき〉の2つであった。患児の成功要因としては、〈幼少期の患児(姉)の食事療法に対する態度と遂行能力〉〈患児の治療ミルク摂取のための工夫〉などの5つが抽出された。主たる養育者の成功要因として、〈母親の患児の病気との付き合い方に対する思い〉〈患児の食事療法の自立に向けた教育的関わり〉〈食事療法と学校給食の両立のための母親の交渉意欲と能力〉の10要因であった。学校の成功要因は、〈学校側の食事療法への理解と協力的な姿勢〉〈学校側の支援体制の整備〉〈患児の治療ミルクについて理解してくれる相談相手の存在〉の3つであった。

【結論】

主たる養育者の語りから、食事療法と学校給食の両立には、それぞれの課題と向き合い、患児・家族・学校の強みを活かした協働の重要性が明らかになった。支援の実践への示唆として、「主たる養育者の患児の食事療法の自立に向けた教育的関わりのサポート」と「学校との交渉・調整能力をエンパワメントする関わり」が有効であると考えられた。